

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ⑨

* ヴェネツィアという名の劇場 *

緋月 まや



アドリア海の干潟に築かれた水の都ヴェネツィアは、旅人にとって究極の非日常的都市である。大小百二十近くの島からなり、どこに出かけるにしても歩いて橋を渡るか船に乗るかしかない。車という選択肢はない。まちの中をS字状に流れる大運河カナル・グランデには水上バスがのんびりと行き交い、網の目のように入り組んだ小運河には旅客を乗せたゴンドラがたゆたう。縞模様のシャツを着たゴンドリエーレたちが、哀愁あふれる民謡を歌いながらオールを漕ぐ。河岸に立ち並ぶゴシック様式やルネサンス様式の宮殿の装飾は、どこかオリエンタルなたたずまいを見せ、東方貿易の覇者として「アドリア海の女王」と謳われたヴェネツィア共和国千年の栄華を彷彿とさせる。とりわけ、まちの中心にそびえたつサン・マルコ寺院はビザンティン建築の代表とされ、壁と天井を覆うまばゆいばかりの金地のモザイクが、その巨万の富を象徴するかのようだ。

そんな非日常的光景の中で味わう「プロセッコ」は格別だ。イタリアの国民的アルコール飲料で、

ヴェネツィアを州都とするヴェネト州が産出するスパークリングワインである。ほどよい辛口で、好みが分かれるシャンパンのような酵母臭はない。本来は手頃な価格で楽しむものだが、運河上に設置されたレストランやバーのテラスでいただく本場のプロセッコには、ほかのまちで飲むのとは違った高級感が漂う。プロセッコをベースにしたイタリアの国民的カクテル「スプリッツ」もヴェネツィア発祥とされ、アペリティーヴォ（食前酒）の定番だ。甘くほろ苦いアペロールというリキュールを加えてつくる。その鮮やかなオレンジ色が海に沈む夕陽



を想わせ、とてもロマンチックな飲み物だ。サン・マルコ広場にある欧州最古のカフェ「フロリアー

ン]でいただいたら、一杯 2500 円近くした。ロシアのウクライナ侵攻後、物価が急騰した昨今では、さらに高くなっているかもしれない。会計もはなはだしく非日常的ではある。

もちろん、ヴェネツィアにも日常はある。地元の人が日々、高級カフェや海の上のレストランを利用しているはずはない。ヴェネツィアは基幹産業を観光業とする正真正銘の観光都市だ。こういった施設はヴェネツィアという名の劇場に観客を招き入れるための舞台装置であって、地元の人

は「バーカロ」に通う。ヴェネツィア特有の大衆居酒屋のことで、立ち飲みしながら気軽に会話を楽しむ店だ。車道のないヴェネツィアでは、小道が迷路のように複雑に交錯している。京都の路地でさえよく迷ったものだが、その比ではない。Google Map で目的地を検索しても、ぐるぐると考え続けているだけでいつまでたっても道順を教えてくれない。

さもない。東に行けと言うのでそちらに歩み出したとたん、いや北だ、やはり西だと、ころころ意見を変えるので話にならない。Google Map でさえ道に迷わせる迷宮なのだ。そんなヴェネツィアの、もはや偶然でしかたどりつけないような路地裏の一角に「バーカロ」はある。小さな店内は食事時にはたいてい混み合っていて、よそ者が紛れ込むのは至難の業だ。勇気を振り絞って入店に成功し、そこで一杯のプロセッコをいただくことができたなら、それもまた特別な、忘れられない旅の思い出になるだろう。あるいは、量り売りでワインを売っている店にペットボトルを持参して、見たことも聞いたこともないような地元のワインを詰めてもらって晩酌するのもおもしろい。旅人にとっては当地の日常を垣間見ることまた、ちょっぴりスパイスを効かせた非日常のひとつなのだから。

しかし、なんといっても、ヴェネツィアのまちが

その非日常性を極めるのは二月、carnevale(カーニバル)の二週間だ。仮装コンテスト、舞踏会、パレードと、さまざまなイベントが繰り広げられ、ただまちを歩いているだけで十分に刺激的だ。迷路のようなその路地で、夕暮れ迫る河岸で、何世紀も昔の宮殿からまるで今抜け出してきたかのような、豪華な衣装に身を包んだ紳士淑女にすれ違うからだ。みんなが貴族の扮装をしているわけではない。天使も悪魔も怪人もいる。彼らはみんな仮面をつけていて、その下の素顔はわからない



い。ちょっと大きな広場に行けば、そんな思い思いの変装を楽しむ彼らが、カフェで優雅にプロセッコを飲んでいたり、扇を片手に妖艶な笑みを浮かべてたたずんでいたりする。シュールだ。スクリーンの中か舞台の上でしか見かけないような光景が、ヴェネツィアというひとつのまちを侵食する。彼らが職業俳優ではなく一般人であることを思えば、イタリア人とは実に演劇的な人たちである。

ヴェネツィアのカーニバルは、その起源を中世にさかのぼる。身分によって服装が定められていた当時、カーニバルの間だけは異なる階級や性別の衣装を身に着けることが許された。仮面をつけることによって匿名性が保たれるため、そこに、日常の行動規範や社会的制約から逃れ、身分を超えて自由にふるまうことが許される非日常の祝祭空間が出現することになる。伝統的なヴェネツィアの仮面には、16 世紀に北イタリアで誕生した「コメディア・デッラルテ」と呼ばれる仮面を使った

即興喜劇の登場人物を踏襲しているものも多い。たとえば、目から鼻にかけて顔の半分を覆う仮面「コロンビーナ」は魅力的な女性召使い、「パンタローネ」は強欲で年老いた商人、「アルレッキーノ」は道化師を表す仮面だ。表に見せる顔をつけることで演者自身はその裏側に姿を消す、日本の能面の役割とも似ているように思われる。ほかには、ペストが流行していた時代の医師が実際に着用していたという「メディコ・デッラ・ペステ」も代表的な仮面だ。鳥のような長いくちばしがトレードマークで、ここに薬草を詰めて感染から身を守っていたそうだ。現代的な仮面では猫をモチーフにしたものをよく見かける。こういった様々な仮面の下に、日常の自分を隠すのだ。



このカーニバルという祝祭は、日本語では「謝肉祭」と訳される。語源がラテン語の *carnem levare* (肉を取り除く) であるとされることから考えれば、「謝肉」の意味は、断酒ならぬ断肉ということになるだろう。カトリック国であるイタリアでは、磔刑に処されて息絶えたイエスが三日目に蘇ったことを尊び、春分から数えて最初の満月を迎えた次の日曜日を *Pasqua* (復活祭) と定めて祝う。人間の罪を贖って死んだイエスの受難に思いを馳せ、この復活祭の四十日前から「四旬節」と呼ばれる節制期間に入る。伝統的には、食事は贅沢な肉料理を控え、祝宴を禁じた。教会離れが進んだとされる現代のイタリアではさほど厳格なものではなさそうだが、カトリック信者である友人の家では実際に子どもたちがお菓子を断っていた。

この禁欲生活に入る前にお祭り騒ぎを楽しんでおこうという発想が、カーニバルの謂れなのである。とはいえ、四旬節にワインを控えているという人の話はまだ聞いたことがない。やはりイタリアでは、ワインはイエスの血であり、神聖な飲み物なのだろう。

ただし、カーニバルの原型はイエスの誕生前にさかのぼり、古代ローマの農神祭の中で生まれたとされる。人々は農神サトルヌスに生贄を捧げ、豊作を祈り、その期間だけは仮面をつけた上で社会的地位の入れ替えが行われた。主人と奴隷が役割交代を演じて饗宴にふけたのである。戦争の絶えなかった古代ローマ社会で、市民の士気を上げるために必要だったという。カトリック

教会はその支配体制を確立する中で戦略として、この異教の祝祭をキリスト教に関連づけて取り込んでいったのである。

A carnevale ogni scherzo vale (カーニバルでは無礼講) と、ことわざにある。 *vale* が韻を踏んでいるところは、さすが言葉の音楽性に敏感な歌劇の国イタリアである。そう、すべて

はお芝居なのだ。この無礼講、すなわち社会的属性の転換はカーニバルという劇場の中でつかの間、演じられるにすぎない。舞台の幕が下りれば仮面を外して、また元の自分に戻っていくしかない。それでも、人生という舞台を生き抜くためには、そんな遊戯にふけて息を抜く瞬間が必要なのだ。私たちが旅に出かけたくなるのも、そのせいかもしれない。職業人としての自分、家庭人としての自分、そこに割り当てられた日常的役割の一切から逃れて、時には違う自分を演じてみたい。そんな願いを叶えるには、最高の舞台となるヴェネツィアなのである。

(ライター、 イタリアソムリエ協会/
AIS 認定ソムリエ)

イタリアげんぱつ紀行 その1

* ガイガーカウンターが家に届いた *

二宮 大輔

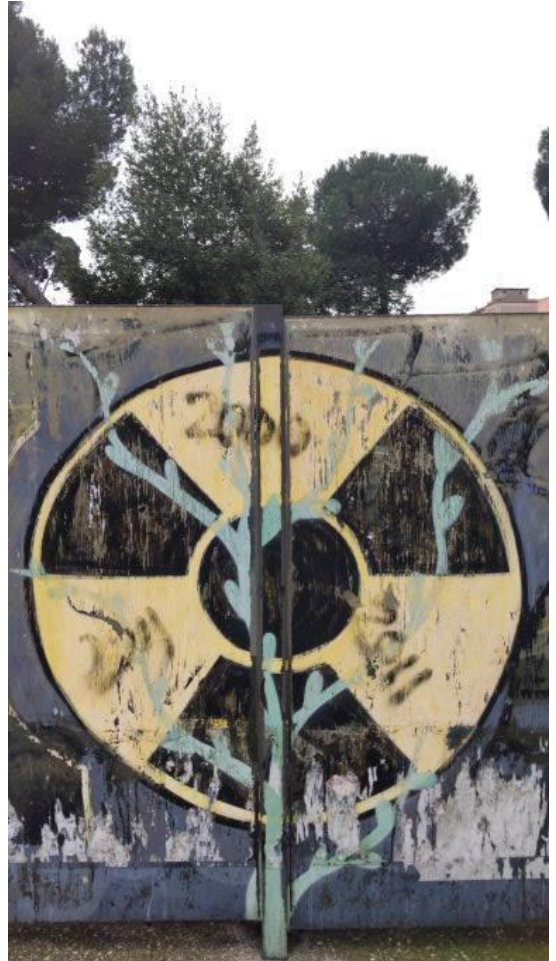
2022年12月11日、ガイガーカウンターが京都の自宅に届いた。正確には家庭用の放射線測定器で、大きさも形もペンライトに似ている。それにしても、ガイガーカウンターとはなんと懐かしい響きだろう。約十年前はガイガーカウンターに加え、半減期、マイクロシーベルト、除染といった、それまで耳なじみのなかった用語が飛び交っていた。今ではすっかり原発関連の用語は忘れられ、なんなら、新型コロナウイルスの用語がそれらに取って代わっている。

放射線測定器を購入した理由は他でもない。イタリアの原発についてかねがね書いてみたいと思っていたからだ。

以前イタリアでの長期滞在を始めたのは2005年の1月だった。当初一年間の語学留学のつもりが、2012年までそのまま七年間もローマに居座って、大学をなんとか卒業した。卒業後は日本に戻り、観光ガイドを中心にイタリア語の仕事で生計を立てていたが、新型コロナウイルスの影響でイタリア人観光客が来られなくなり、仕事がほぼゼロになった。これが苦しかった。苦しかったのは仕事を失ったからではない。もちろんそれもあるが、これまでに経験したことのない非常事態に直面しているイタリアにおらず、イタリアに住む人たちとその経験を共有できていないことがなによりも苦しかった。曲がりなりにもイタリアに関する翻訳や文章に携わる身として、「コロナ禍をイタリア人と共有していないこと」が、これから先、自分にとって負い目になるような気がしたのである。

そのようなわけで、イタリアと日本の行き来ができるようになった2022年、知り合いの翻訳会社のリモートワークで毎月の収入にある程度の目途がついた私は、12月から約三か月間、なつかしのローマに滞在することに決めたのだった。ただ、

コロナ禍はイタリアではすでに落ち着いているようだ。そこで、以前の滞在時に問題となっていた原発について、時間を置いた現在、どのような状況にあるのか調べてみようと思ったのだ。



【ローマの街角にある原発マークの落書き】

調べてみると、現在イタリアには原発が5基あり、いずれも廃炉となっている。年代順に振り返ってみると1963年にラツィオ州ラティーナでイタリア初の原発が建設され、立て続けに1964年にカンパニア州セッサ・アウルンカ、1965年にピエモンテ州のトリノで原発が建設される。カタカナにすると同じ表記になってしまっただけで、トリノというのは州都のトリノ(Torino)ではなく、ヴェルチェッリ県にある人口6800人のトリノ(Trino)だ。1966年、この3基の原発でイタリアは世界第三の原子力エネルギー生産国となる。さらに、オイルショックによる原油供給の逼迫から、1970年代には石油による火力発電への依存から脱却する

ため、原発推進に追い風が吹いた。こうして、エミリア＝ロマーニャ州の小村カオルソで原発建設が開始、ラツィオ州の小村モンタルト・ディ・カストロで原発建設が計画され始めた。

だがここで事件が勃発する。1979年のスリーマイル島原子力発電所の事故だ。原発運用の危険性を指摘する世論が高まるなか、追い打ちをかけるように1986年にはチェルノブイリの事故が起きた。チェルノブイリから約1600キロの距離にある北イタリアでは被爆の影響もあったと言われている。

この二つの事故を受け、1987年にイタリアで原発の運用および建設を廃止・中止するか否かの国民投票が行われ、投票者の約80パーセントが廃止に賛成し、原発の廃止が決定する。こうして、すでに軽微な事故によって廃炉になっていたセッサ・アルウンカ原発を除く、ラティーナ、トリノ、できたばかりだったカオルソ原発の運転が停止され、1990年には稼働中の原発がゼロの状態となった。建設中だったモンタルト・ディ・カストロ原発は運用されることなく、その一部機能は現在、同市にある火力発電所で利用されている。

結局のところ原発によって生み出されていた電力は、国内電力需要量の4パーセントほどだったが、1990年の時点で原発廃炉に舵を切り、原発による経済政策を切り捨てたという意味では、大きな決断だっただろう。その後、原発の稼働を継続するスロバキアやフランス、ドイツなどの電力に、国内電力需要量の約10パーセントを頼り続けているというのも、看過できない事実だ。

イタリアの主要な電力供給元は、今も昔も火力発電だが、2000年代に入り、その燃料となる石油、天然ガス、石炭の価格高騰をきっかけに、第4次ベルルスコーニ内閣が10基の原子炉を新設するという新たなエネルギー政策を打ち立てた。イタリア各州の反対を押しつけて、政策は進められたが、紆余曲折を経て2011年6月に国民投票が行われ、94パーセントが原発エネルギー政策に反対する結果に終わった。投票の三か月前に起きた福島原発事故も、投票結果に少なからぬ影響を及ぼした。

そして二度目の国民投票から十数年が過ぎた現在もまた、新たに原発再開の機運が国内で高

まっている。理由はもちろん、ヨーロッパ全体で深刻な気候変動を食い止めるために、火力発電による二酸化炭素の排出を抑える必要があるからだ。さらにロシアによるウクライナ侵攻以降は、天然ガスの価格高騰も大きな理由の一つだ。おそらく、今後も周期的に原発再開の議論は繰り返されるのだろう。

そしてこのように振り返ってみると、1960年代に新しいエネルギーとして原発を推進した日本と共通する部分も多々ある。大きく違うのはその数だ。日本には59基の原発があり、国土面積に対する原発の割合が最も高い国だが、国土の面積をほぼ同じにするイタリアには原発が5基しかない。これは、原発に反対する左派が一定の支持を集めていたことが大きかったと思われる。第二次世界大戦後、イタリアでの原発建設を推進しようともくろむアメリカを阻んだのはイタリア共産党であったし、二回の国民投票を発議したのも当時力の強かった左派政党だった。

*

二度目の国民投票のことは、イタリアにいた時期だったのでよく覚えている。福島原発事故の直後ということもあり、日本でも大変注目されていた。投票の結果を受けて首相ベルルスコーニが「イタリアは原発にさよならを言わなければならないだろう」と記者会見で発言したのも、彼が素直に敗北を認めるのは珍しいなという感想を抱いたので記憶に残っている。

当時は日本と同様にイタリアでも原発に関する議論が大いに盛り上がっていた。舞台俳優ウルデリコ・ペツシェの劇を観たのもこの頃だった。

それは原発の危険性を独白で訴える『廃棄物の物語』(Storie di scorie)という劇で、作品自体は2003年に作られたものだが、2011年の国民投票を機に再注目された。

ストーリーはこうだ。バジリカータ州の核廃棄物貯蔵施設のある ENEA(新技術エネルギー環境局)研究センターで働いた経験があり、現在はトリノで郵便配達員をしている男ニコラが、バジリカータの実家に住む妹に子どもが生まれるという旨の手紙を受け取る。彼は急いでバジリカータに戻り、無知な家族に、施設の危険性を熱心に訴える。かなり衝撃的な内容で、国内の演劇賞も数多く受賞

している。

ペッシェはもともと社会問題をテーマにした作品を多く手掛けており、本作は環境問題三部作の一作目と位置づけられているが、一連の作品が原因で脅迫を受け、2018 年には一年間警察による警護を受けることとなった。

彼が警鐘を鳴らしたのは、廃炉となった原発だけでなく、1960 年代にアメリカから引き受けた核廃棄物の貯蔵施設と、それを管理する ENEA という組織に対してだ。彼の出生地でもあるバジリカータ州のトリザイア・ディロトンデッラには ENEA がつくった廃棄物汚染水を流す巨大パイプが通っており、破損したパイプのすぐ横に、いちご畑が広がっているのを見て戦慄を覚えたという。今はいったいどうなっているのだろうか。当然ではあるが、原発が稼働していたなら核廃棄物の貯蔵地もあるし、むしろそちらの放射線量こそ気になるところだ。さらに調べてみると、ENEA の研究センターには研究炉と呼ばれる、研究用に稼働している原子炉もあるらしい。これはどこから手を付ければいいのか、なかなか收拾がつかなくなってきた。

ローマのアパートでそんなことを考えながら、日本から持ってきた放射線測定器でまずは家の中の線量を測ってみた。0.46 マイクロシーベルト毎時。京都の自宅では 0.05 マイクロシーベルト毎時だったので、およそ 9 倍だ。測定器を買ったときに付いていた小冊子によると、1ミリシーベルトが 1000 マイクロシーベルトで、日本で一年間に受ける自然放射線は約 1.5 ミリシーベルトとのことだ。毎時間 0.46 マイクロシーベルトを一年間に置き換えると約 4 ミリシーベルトということになる。それでもまだまだ人体に影響が出るほどの量ではないそうだが、京都の 9 倍とは驚いた。ひょっとするとローマから 25 キロの距離にあるカザッチャの貯蔵施設の影響なのだろうか。

だが、突き詰めると、こうやって放射線量を測って隠された事実を暴きたいわけでも、原発反対を掲げたいわけでもない。

それよりも私はイタリア人の心の深部に触れたのだ。感覚的な話だが、コロナがそうであったように、ウルデリコ・ペッシェが自分の身を危険にさらしながらでも訴えようとしているテーマには、

彼らの心の深部にアクセスできる鍵があるように思う。それならば試みに原発を訪問してみようと思ったのだ。

(つづく)



【『破棄物の物語』を演じるウルデリコ・ペッシェ】

出典元: <https://www.uldericopesce.it/index.php/foto-storie-di-scorie>

(翻訳家、元当館語学受講生)

<春の無料体験レッスン>

4 月からの春学期に先だって、無料体験レッスンを開催いたします。お申込みお待ちしております。

- イタリア語無料体験(初心者向け)
京都本校: 4月4日(火)13:00
4月8日(土)11:00
四条烏丸: 4月3日(月)19:00
大阪梅田校: 4月4日(火)19:00
- イタリア語無料カウンセリング(経験者向け)
京都本校: 4月8日(土)14:00~
- スペイン語無料体験(初心者向け)
京都本校: 3月30日(木)10:30

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>